



北の鉄道風景

第138回 最終回

鉄道
讃
歌

Train number; 54D
2016.9.23 17:11
1/250, f/7.1, ISO 200, Panoramic View, Daylight/Sunny
10444×4877 Raw



写真と文＝眞船直樹

海は暗さを映し取るような深い色の息をしていた。空は太陽の黄金が遠のき、星たちの世界を迎えようと急ぎ足だった。雪や風ですっかり虐げられた樹木たちは、寄り添って眠りに就こうとしていた。そんな時、珍しくゆっくり流れていた空気がかすかな振動を伝え始める。それはやがて規則正しいリズムになつて、やっと、という風情で耳元に辿り着く。闇に還ろうとする原野を切り裂いて光が灯る。二条の曲線が浮かび上がる。もう、かすかなリズムではない。もう、小さな光ではない。人類が築き上げた文明が大きな叫びとなって眼前を通り過ぎる。

鉄道とはそういう文明だ。このたくましくも愛おしい文明は、地球や宇宙と対峙しても決して見劣りしないばかりか、より一層輝く。一三八億年の宇宙、四六億年の地球から見ればあまりにも小さいこの文明が見せるそんな姿に、私の目は潤み、腹の底から声を上げる。